

田舎がえり

林芙美子

青空文庫

東京駅のホームは学生たちでいっぱいだった。わたしの三等寝台も上は全部学生で女と云えば、わたしと並んだ寝台に娘さんが一人だった。トランクに凭もたれて泣いているような鼻のすすりかたをしている。わたしは疲れていたので、枕もとのカアテンを引いてすぐ横になったが、眼をつぶらないうちに頭のところのカアテンが開いてしまつて、三階の寝台で新聞を拡げている音がしている。三階から下まで通しになつた一つのカアテンなので、一人が眠くなつて灯をさえぎりたくても、上の方で眠くない人がカアテンを開けると、寝た顔は何時いつまでも廊下の灯の方へ晒さらしていなければならぬ。仕方がないので、ハンカチを顔へあてて眠つたが、なかなか寝つかれなかつた。阿部ツヤコさんの三等寝台の随筆を読むと、近所同士がすぐ仲よくなれて愉たのしそつたけれども、わたしの三等寝台はとつつきばのない近所同士だった。熱海あたみあたりで眼が覚めると、前の娘さんは帯をといて寝巻ところきに着替える処ところだった。羽織と着物を袖そでだたみにして風呂敷に包むと、少時わたしの寝姿を見ていて横になつた。

(どの辺かしら) わたしはひとりごとを云つてちよつと起きあがつてみたが、娘さんは黙つたまま湿つたようなハンカチを顔へあてて鼻をすすっている。二階の寝台からは縄のよ

うになったサスペンダーと、大きな手がぶらさがっている。気になってなかなか寝つかれなかった。ポーランドの三等列車にどこか似ている。――朝眼が覚めたのは大垣^{おおがき}あたりだった。娘さんは床の上へハンカチを落してよく眠っていた。昨日は灯火^{あかり}が暗くてよく分らなかったけれども、本当に泣いたのだろう、^{まぶた}瞼が紅くふくらんでいた。顔を洗いに行つて帰つて来ると、娘さんは起きて着物を着替えていたが、わたしの上の寝台からは、まだサスペンダーがぶらさがっている。娘さんと眼が合つても娘さんにはこりもしない。よっぽど考えることがあつたのだろう。小さい鏡を出して髪^{かみ}かたちを調^{ととの}えると、また昨夜のようにトランクに肘^{ひじ}をついて鼻をすすっていた。

＊

わたしは京都へ降りた。二等車からも、外国人が四、五人降りて来ていた。わたしは赤帽がみつからなかったの、ホームへ降ろしたトランクをさげて歩み出すと、「ヴアラ」と云つて、わたしの小さい蝙蝠傘^{こうもりがさ}を背の低い男の外国人がひろつてくれた。「メエルスイ・ビヤン！」^{こた}そう応えて、わたしは思わず顔の赧^{あか}くなるような気持ちを感じてたじ

となつてしまった。巴里パリにいたとき、何度かこんな片言かたことを云つていたが、京都でこんな言葉を使うとはおもひもよらないことだ。関西に住み馴れた仏蘭西人フランスなのだろう。橋を渡つてさつさと改札口へ行つた。同じ席にいた鼻をすする娘さんも京都で降りてわたしの横を改札口の方へ歩いて行っている。

朝なので、駅の前はしつとりしてゐて気持ちがよくつた。ホテルの旗をたてた人力車が何台もならんでいたりする。東京駅には人力車なんてなかったが、京都は人力車が随分多い処だ。――繩手なわての西竹と云う小宿へ行つた。小ぢんまりとした日本宿だと人にきいていたので、どんな処かと考えていたが、数寄屋造りすきやとでも云うのだろう、古くて落ちついた宿だった。前が阿波屋と云う下駄屋で、狭い往来おうらいはコンクリートの固い道だった。荷車に花を積んだ花売りが通る。赤い鉢巻きをした黒い牛が通る。朝の往来はさすがしかった。わたしの部屋は朝だと云うのに暗くて、天井の低い部屋だった。裏は四条の電車の駅とかで、拡声機しやうしの聲がひっきりなしに聴えて来る。わたしは小さい机に凭れて宿帳やどちやうを書き、障子しょうしを開けてみたり、鏡台の前に坐つてみたりした。明日の講演さえなければ奈良の方へでも行つてみたいなおもつた。

障子を開けると、屋根の上に細い台がこしらえてあつて、幾鉢か植木鉢が置いてある。

白い花を持った躑躅^{つづじ}や、紅い桃、ぎんなんの木、紅葉、苔^{こけ}の厚く敷いた植木鉢が薄陽^{うすび}をあびて青々としていた。庭が狭いので、屋根の上に植木を置いて愉しむ気持ちを面白いとおもった。如何^{いか}にも京都の宿屋らしいと、わたしは、屋根にある桃の鉢を両手にかかえて机へ置いて眺めた。いい苔の色をしていて、素焼^{すやき}だけれど、鉢は備前焼のような土色をしていた。

＊

早いめに昼食を済ませて、わたしは山科^{やましな}の方へ行ってみた。十年位前だったかに、大津から疏水^{そすい}下りをしたことがあったが、その折に見た山科の青葉は心に浸^しみて忘れられなかったので、わたしはあの辺をぶらぶら歩いてみたいとおもった。円タクをひろってどこでもいい景色のいい疏水のほとりに降ろして下さいと云うと、都ホテルの下の道を自動車はゆるく登って行つた。都ホテルの堤^{けあけ}には、つぼみを持った躑躅の木が堤いっぱい繁つていた。自動車の運転手が、これが蹴上^{けあげ}の躑躅だと教えてくれた。

疏水のほとりで降りて、それから橋を渡り、流れに添ってぼくぼく歩いてみた。何と云

う町なのか知らないけれども、郊外らしく展^{ひら}けていて、新らしい木口^{きぐち}の家が沢山建つていた。それでも、時々、廃寺のような寺があったり、畑や空地^{あきち}などがあった。寺の門を配した豪奢^{ごうしゃ}な別荘もある。廃寺の庭は広々とした芝生^{しばふ}で、少年が一人寝転んで呆^ぼんやり空を見ていた。白い雲が、疏水の水に影をおとして流れている。いい天気だった。堤の下の方赤松越しに、四条行きの電車が走っている。電車道の人家の庭には白い卵^うの花^{はな}がしだれて咲いている。磚茶^{せんちや}の味のような風が吹く。ごろりと横になりたいような景色だった。蹲踞^{しゃがみ}んで水の面^みをみていると、飛んでゆく鳥の影が、まるでか^かま^すかなんかが泳いでいるように見える。水色をした小さい蟹^{かに}が、石崖^{いしがけ}の間を、螯^{はさみ}をふりながら登つて来ている。虻^{あぶ}のような羽虫も飛んでいる。河上では釣^{つり}をしている人もいる。何が釣れるのか知らない。底まで澄んでみえるような水の青さだった。時々、客を乗せた屋形船^{やかたぶね}が下りて来る。大津へ帰る船は、船頭が綱を引っばつて、なぎさを船を引いて登つて来ている。船は屠殺場行きの牛のようにゆるく河上へ登っている。水のほとりの桜はまだ咲いていた。青葉の間に散りぎわの悪い色褪^{いろあ}せた花をのこして、なぎの日のような煙つた淡さで咲いていた。

堤を降りて、道を探しながら電車道の方へ行くと、洋服を着た子供たちが、京言葉で泥あそびをしていた。

電車の駅近くへ出ると、小料理屋の間に挟はさまって、大石内蔵之助くらのすけの住んでいたと云う、写真や高札こうさつを立てた家があった。黄昏たそがれちかくて、くたびれきっていたが私は這入はいってみた。家の中は暗くていい気持ちではなかった。入口から等身大の義士人形がずらりと並んでいた。打ち入りに使った色々なものがてすりの向うに飾ってあったが、暗くて詳しく眼に写って来なかった。小砂利が家じゅう敷きつめてあって、地獄極楽を觀に來たような感じだった。義士人形は古いせいか、顔の色が褪あせて、指がかけていたり、鼻がこぼれていたりして、気味の悪い姿だった。

＊

電車で宿へ帰ると、また風呂へ這入り、わたしは机の前に坐ってみたが、何となく落ちつかないで困ってしまった。明日の十二日は啄木たくぼくの記念日だと云うのだけれども、啄木が生れた日なのか亡くなった日なのか、それさえわたしは知らない。読むにはどんな歌がいいだろうと、わたしはトランクから啄木歌集を出してあっちこっちめくってみた。

百年^{ももとせ}の長き眠りの覚めしごと
呻^{あくび}してまし

思ふことなしに

山の子の

山を思ふがごとくにも

かなしき時は君をおもへり

こんな歌が眼にはいつた。辛^{つら}くなるような気持ちだつた。一条大宮と云う処はどんな処
なのだろう。羅生門^{らしやうもん}と云う芝居を見ると、頭に花を戴いた大原女^{おはらめ}が、わたしは一条大宮
から八瀬^{やせ}へ帰るものでござりますると云う処があつたが、遠い昔、一条大宮と云う処はわ
たしになつかしい人の住んでいた町の名であつた。懶^{ものう}いので横になつて啄木を読む。

空知川^{そちがわ}雪に埋^{うも}れて

鳥も見えず

岸辺の林に人ひとりるき

むかし空知の滝川と云う町にわたしも泊ったことがある。旅空でこんな歌を読んでいると、夙^とから旅にいるような気持ちだ。

十二日は朝から雨だった。紫竹桃^{しちくもも}の本^{もと}町^{ちやう}のお波さんへ電話をかける。正月大阪へ来た折に文楽の人形を頼んでおいたのが出来たかどうか。首がまだついていないけれども、衣装が美しいから早く見せたいと云う返事だった。「そんなら、神戸の帰りに寄りますけど、それまでには出来てる？」と訊^きくと、あんじよう出来てますと云う返事なので、わたしはすぐ雨の中を神戸へ行き、窪川^{くぼかわ}鶴次郎^{つるじろう}氏^し、渡辺^{わたなべ}順^{じゆん}三氏^{さん}たちと逢い、啄木の講演を済ませて神戸の諏訪山の宿へ二泊して、十四日に尾道^{おのみち}へ発^たって行つた。ふと、海がみたくなったからだ。汽車が駅々へ着くたび昔聞き馴れた田舎^{いなか}言葉がなつかしく耳に響いて来る。わたしはさまざまな記憶で落ちついていられなかった。歛^{よろこ}びで、胸がはずんでいた。幼い日の女友達に逢いたいとおもつた。もう女学校を卒業して十年以上になるのだから、その人たちはみんな奥さんになって、子供があるに違いない。

*

尾道の駅には昼すぎて着いた。新らしい果物屋、新らしい自動車屋、新らしい自働車屋、新らしい栈橋、何か昔と違った新鮮な町に変わっていた。道も立派になり女車掌の乗っている銀色のバスが通っているけれども、いまだに昔と変わらないのは、町じゅうが魚臭いことだ。その匂いを嗅ぐと母親を連れて来てやればよかったとおもった。だが、あんまり町が立派になっているので、歓びがすぐ失望にかわって行ってしまう。町では文房具屋にかたづいている友達を尋ねてみた。もう四人もの子もちだった。

「まア！ 誰かとおもえば、あんたですかの、どうしなさったんなア、こんなにとつぜんで、ほんまに、びつくりしやんすが喃」

そう云って、その友達は、白粉の濃い綺麗な顔で、店の暗い梯子段を降りて来た。

——わたしは海添いの旅館に宿をとった。障子を開けると、てすりの下が海で、四国航路の船が時々汽笛を鳴らして通っている。向島のドックには色々な船が修理に這入っていた。鉄板を叩く音が、こだまして響いて来る。なごやかに景色に融けた気持ちであった。ひそかな音をたてて石崖に当る波の音もなつかしかった。てすりに凭れて海を見ていると、十

年もの歳月が一瞬のように思えて仕方がない。この宿屋に泊るのに、金は大丈夫だったかしらと、何の錯覚からかそんな事まで考えたりした。

昔、わたしはこの町で随分貧しい暮らしをしていた。さまざまなものが生々と浮んで来る。その当時の苦痛がかえつてはつきり心に写つて来る。休止状態にあつたみじめな生活が、海の上に浮んで来る。わたしは昔のおもい出で、窒息しそうに愉^{たの}しかった。その愉しさは狂人みたいだった。Y^{シヤツ}襯衣の胸の釦^{ボタン}をみんなはずして、大きな息をしたいほどな狂人じみた悲しさだった。明日は因^{いん}の島^{しま}へ行つてみようと思つたりした。

風呂から上ると、わたしは廊下を通る女中を呼びとめて、上等の蒲団^{ふとん}へ寝かせて下さいと頼んだ。なりあがりものの素質をまるだしにしてしまつて、だが、その気持ちは子供のような歓びなのだ。わたしは海ばかり見ていた。ちぬご、かわはぎ、かながしら、色々な魚が宙に浮んで来る。

夜になると宿屋の上をほととぎすが鳴いて通つた。この町では晩春頃からほととぎすが鳴きに來た。学校の国文の教師や、女友達が遊びに来てくれた。子供を寝かしつけていて遅くなつたと云う友達もあつた。

*

翌日は早く起きて因の島行きの船へ乗った。風は寒かったがいい天気だった。船が町に添って進んでゆくので、わたしは甲板に出て町を見上げた。わたしの住んでいた二階が見える。円福寺と云う家具屋の看板が出ていた。わたしは亡くなった義父の棺かん桶おけを見ているような気持ちだった。千光寺山には紅白の鯨くじら幕まくがちらほら見えた。因の島の三ツ庄へ行くのを西行きとまちがえてたくまと云う土地へ上った。船着場の酒屋で、歩いてどの位でしようと訊くと、一里はあるだろうと云う返事なので、荷物が大変だと、船をしたてて貰って三ツ庄へ行った。小さい和舟の胴中に、モオタアをつけた木の葉のような船で、走り出すと、頬ほがぶるぶるゆすぶれる。はぶの造船所の前を船が通っている。社宅が海へ向って並んでいる。初めて嫁入りをして行った家が見える。もう、あの男には子供が沢山出来ているのだろうと、ひらひらした赤いものを眼にとめて、わたしはそんなことを考えていた。

造船所の岬みさきの陰には、あさなぎ、ゆうなぎと書いた二そうの銀灰色の軍艦が修理に這入っていた。白い仕事服の水兵たちがせっせと船を洗っている。赤い筋のある帽子が遠くか

ら蛸ほたるのように見えた。三ツ庄へ着いて親類の家へ行くと、子供も誰もいなくて、若夫婦が台所の土間で散髪をしていた。小さい犬がわたしの膝ひざへ飛びあがって来た。髪を刈りかけて、若夫婦は吃驚びっくりして走って来た。

「とつぜんぞやがのう、どうしたんなア、わしや、誰かおもって吃驚のうしたがつ喃」

尾道でも同じようなことを言われたと云って、わたしは、犬と一緒に庭の中をあっちこっち歩いてみた。

「そりやアまア、よう来てつかアさつた。えつとまア御馳走しやすんで、ゆつくりしとつてつかさい喃」

若い主婦は何からしていいかと云う風に、立ったり坐ったりしている。いかなご、まて貝、がどう、そんなものを煮て貰つてたべた。田舎の味がして舌に浸しみた。遠くの荒物屋へ風呂を貰いに行つて、子供たちとかえりに海へ行つてみた。あんまり森しんとした海なので、まるで畳のようだと云うと、子供がこんな黄昏たそがれを鯛なぎと云うのだと教えてくれた。鯛が入江へ這入つて来る頃は、海が森となぎて来るのだと云っていた。小波さざなみの上を吹く風の音さえ聞えそうに静かな海だった。夜になると、この辺の船は、洋灯をつけていたが、いまもそうなのだろうか。——島へ来て島の人たちの生活を見ると、都会の生活とは

何のかかわりもないのだ。漁師は漁をし、子供は学校へ行き、百姓は土地をたがやすのに忙^せわしいし、造船所の職工は職工で朝から夜まで工場だし、一軒しかない芝居小屋も幾月となく休みだと云うことだ。学校帰りの子供がつくしを沢山とつて帰っている。何時^{いつ}の日か金の値うちがなくなり、田舎をたよりにしないと誰が云えよう。そう云う暮らしに早く帰って来たいとおもった。自分で食べるものをつくつて暮らすのは愉しいことだろうとおもった。地酒をよばれ一泊して尾道へ帰った。

＊

学校の図書館の裏の秋の草

黄なる花咲きし

今も名知らず

尾道では女学校の庭へも私は行つてみた。女学校には図書館はないけれど、講堂の裏に、小さい花畑があり猫塚があつたりした。そこには小さい花が沢山咲いていた。新らしく出

来た運動場には桜の並木にかこまれて、生徒たちがバスケット・ボールをして遊んでいた。帰りは神戸へも大阪へも寄らず京都へ降りて西竹へ行った。人形が出来て来ていた。幾月か空想していた人形を前にすると、あんまり立派なので（これは大変だな）と思った。

持って来たお波さんは、一人ではこわれてしまうから、わたしも東京へお供しましょうと云ってくれた。人形はびんつけで髪を結^ゆっていた。半襟^{はんえり}に梅の模様があるのは、野崎村の久松^{ひさまつ}の家に梅の木のあるのをたよりにしたのだからと云うことだった。手は踊りのように自由に動く。まだ娘だから喜怒哀楽がないのだと云って、お染^{そめ}の人形は、まなじりをすずやかにあけて、表情のない顔をしていた。あんまり人形が美しいので、成瀬^{なるせ}無極^{むきよく}氏や山田一夫氏にも宿へ来て貰^{もら}って観^{かん}て貰^{もら}った。雨が降っていた。肩さきがぬれるほどな細かな雨だった。

三人分の三等寝台を買いに行つて貰^{もら}ったが、一つも買えなかったので、わたしたちは空^すいていそうな遅い汽車に乗った。坐^まったなりで身動きも出来ないほどのこみかただったが、途中名古屋あたりで一番上の寝台が空^あいているのをボーイが知らせて来たのでその寝台に人形を寝かせて帰った。人形の寝ている寝台の下は五ツともみんな男のひとばかり横になっていた。

青空文庫情報

底本：「林芙美子随筆集」岩波文庫、岩波書店

2003（平成15）年2月14日第1刷発行

2003（平成15）年3月5日第2刷発行

入力：林 幸雄

校正：noriko saito

2004年8月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

田舎がえり

林芙美子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>